

E. ネズビットによるサミアド三部作における アンシアの創出とフェミニズム

信 田 春 菜

はじめに

19世紀が終わり、20世紀が幕を開け、時代が大きく動いていくときに、児童文学はどのような役割を果たしたのだろうか。児童文学の出現をいつとするには様々な見解があるとしても、一般的には児童文学というジャンルの誕生と近代社会の成立のあいだに密接な関係があり、世界に先駆けて産業化を成し遂げたイギリスにおいて、19世紀半ばに子どものための文学的な物語が書かれるようになったと考えられている。ブルジョア階級が起り、豊かな中間層の子どもたちのための物語の需要が生まれる。

児童文学の一つの特徴は、空想性であろう。イギリス児童文学の初期の代表的な作品においては、日常生活の空間を離れ、異世界の空間へいく物語が展開するが、イーディス・ネズビット（1858-1924）はエブリデイ・マジックと呼ばれる新たな空想の装置を導入し、日常の中で繰り広げられる魔法的な現象を創り出すことに成功した。ネズビットは、子どもたちの日常生活に架空の妖精を登場させ、サミアドと名乗る妖精と、5人の姉弟たちの冒険物語を書いた。日常生活の空間で起こるファンタジーであること、そして子どもたちが自分たちで空想的な冒険に立ち向かうという点において、20世紀の児童文学に新しい風が吹いたと言える。妖精サミアドの登場する物語は三作品あり、*Five Children and It*（1902）、*The Phoenix and the Carpet*（1904）、*The Story of the Amulet*（1906）と続く。これらの作品がサミアド三部作である¹⁾。

本論文の目的は、このサミアド三部作をイギリスにおけるフェミニズムの

潮流との関連において分析することである。妖精サミアドとともに、登場する子どもたちの中で最年長の女の子であるアンシアの人物造形に注目し、中産階級的なジェンダー規範とフェミニズムをネズビットがどのように調和させたのかを読み解きたい²⁾。ネズビットは旺盛な創作活動を展開する一方で、社会主義運動にも携わるが、当時盛んになりつつあった女性の権利運動に直接関わることはなかった。女性の権利運動とは距離を置きつつも、5人兄弟姉妹の長女アンシアを通して、ネズビットは自身の創作を通して、新たな時代の到来に立ち向かうための新しい少女像／女性像を打ちだした、ということ論じることが本論文の目的である。

本研究の着想のもとになったのはミッチェル・スミスによる“E. Nesbit's Psammead Trilogy: Reconfiguring Time, Nation, and Gender”である。スミスの論文は5人姉弟の中でもっとも年長のアンシアに着目し、新しい時代の入り口に立つ少女の経験の意味を分析しているが、その議論をさらに発展させ、アンシアが獲得する中産階級的な価値観はジェンダーの限界ではなく、むしろ積極的な戦略であると論じたい。そのために、イギリスにおける女性参政権運動の流れと第一波フェミニズムについて歴史的に理解し、ネズビットの社会主義運動における活動との思想的接点を探りたい。そのうえでネズビットのファンタジーが空想性と現実的な社会改革をどのように結ぶものであるかという分析をする。そしてアンシアにおいてどのようなジェンダーポリティクスが働いているのか、それをどのように逆手にとって新たな少女／女性の表象の創出を試みているのかを論じたい。イギリスにおいて女性の社会的地位を保障する法案が通過するのは1918年であるが、条件のない男女平等の選挙権の成立は1928年になる。ネズビットが作りだしたアンシアが、いかに時代に先駆ける存在であるか、そしてきたるべき時代を生きることになる少女たちをどのように育んだのかを論じたい。

1. イギリスにおけるフェミニズム

この章では、ネズビットのファンタジーをフェミニズムの視点から、アン

シアを中心に論じるにあたり、19世紀に行われたイギリス女性参政権運動の経緯について確認しておきたい。

1-1. イギリスにおけるヴィクトリア朝期の社会的変化

イギリスのヴィクトリア朝時代は1837年から1901年まで続くが、とくにヴィクトリア朝後期（1870年から1901年）からエドワード朝にかけて、イギリス社会では「急激な変化」が起こる。『アリスの服が着たい』（2007）で酒井は、イギリスは世界で最初に産業革命を経験し、経済基盤が農業から工業へと移行し、近代的な生活の基盤を築いたと述べている。また、事務職、小売業、教職、測量、経理など、都市部における中産階級の職業は種類も需要も大幅に増加した³⁾。

一方で、産業革命の進展は女性の経済的価値の弱体化をもたらした。女性の立場は仕事のパートナーとしての位置から扶養されるものへと変化していき、これが社会の隅々まで影響を与えた。熟練労働者から低賃金労働者への女性労働者の地位が転落したことは、産業の発展による混乱や惨事を増大させた⁴⁾。この変化が進むにつれて、従来の女性の仕事の大半が彼女たちから奪い取られてしまった。このように、女性たちは肉体労働をとるかただ家で静かに座りこむかの選択しかなかった⁵⁾。これら両方からは混乱と不安が生じた。ただ家でのんびりと毎日を過ごす人生しかない裕福な女性たちは、軽薄でおろかになり、虚栄心が強くなる。他方で、生活のために必死に働かなければいけない貧しい女性たちは、酷使され悲惨な待遇を受けた⁶⁾。裕福な女性も貧しい女性もこれが自然の摂理であり、この世の定めであると信じていた⁷⁾。

1-2. 社会的変容と女性の権利意識の芽生え

経済が変化する時代には、人々の意識も変化する。18世紀末から20世紀はじめにかけて、イギリスでは女性の労働に対する権利取得の運動が盛んに行われた。

イギリスにおいてどのように女性の権利意識が芽生え、どのように運動が繰り広げられてきたのかを、ネズビットに重なる時代を中心に、レイ、スト

レイチーの『イギリス女性運動史』を参照しながら確認しておきたい。世界に先駆けて近代化が起こったイギリスにおいて、男女の平等や基本的人権について、どのような議論が繰り広げられたのかを歴史的に概観する。

女性運動の最初の動きは、個々の女性たちが自らの無力さに目覚めたところから始まった。慈善的、人道的運動が進むにつれてこの動きは表面化していき、19世紀の半ばまでには、女性の置かれた地位は何か間違っているのではないかと、という考え方に違和感をもつひとが著しく増えた⁸⁾。

女性たちの「自らの無力さ」とは、19世紀前半の頃、女性は男性に依存することしかできず、女性自身の実質的地位は存在しなかったことであると考えられる。

当時の若い女性たちは、自分の人生に踏み出そうとしたときに、日常生活のどうしようもない空虚さがあり、それに抵抗ができないのである。それは、周囲から真剣に取り上げられるようなことを女性がすることや、発言をして、考えることは自然に反しているうえに間違っている⁹⁾。

女性の脳みそは男性より小さいので、論証力、総活力、論理性、判断力、忍耐力などに欠けるのは当然であり、どうしようもないことなのだ¹⁰⁾。

女性が男性よりも劣っていることは神のなせる業であり、女性の知性の欠如は非常に優れている「本能」で補われている。女性は、魅力的で善良かもしれないが、ただそれだけである。なぜなら、男性を支えることで満足するのが女性のあり方であると一般的に考えられていた¹¹⁾。

四 1-3. 女性参政権運動の起こり

イギリスの女性参政権運動が活気になったきっかけは、1866年にジョン・スチュアート・ミルが女性参政権を求めて国会に請願書を提出したことである。その請願書は受理されたが、翌年の1867年に、ミルは選挙法改正

案に対し女性参政権を求める修正案を提出するが 196 対 73 で否決される¹²⁾。1867 年に第 2 次選挙法が改正されたと同時に、1 月にはマンチェスターで作家のリディア・ベッカーを議長とする全国女性協会が設立される。

1870 年に再度法案を提出するが第 2 読会までは通過するもまたもや否決となる。そして、1884 年の第 3 次選挙法改正の際にも女性の参政権が認められなかったことで、運動は一時休戦する。その後、1893 年 6 月にロンドン、8 月にはマンチェスターで参政権を求める集会が開かれたのがきっかけとなり、再び運動が行われた。

女性参政権運動には活動が 2 種類ある。それらは異なる理想を持ち、組織の運営方法も対抗していた。合法的な協会は、1897 年にミリセント・フォーセットが立ち上げた女性参政権協会全国連合 (NUWSS 以下 NUWSS とする) である。この組織は中産階級の女性たちによる穏健な運動を展開し、サフラジスト (女性参政権論者) と呼ばれた。

彼女たちは、人びとの幸福のための改革であり、人類が発展していくための次の一步を踏み出すことだと考えていた¹³⁾。

彼女たちの主な仕事は世論の転換である。これは、投票権を獲得することと同じくらいに重要で、また、大切な目的の 1 つであると感じていた¹⁴⁾。彼女たちの指導者であるフォーセット夫人は、運動全体が大きくなるのを見守り、彼女たちの主張が女性の地位と変えること以上に大きな人類発展における一部であることを理解して、彼女の支持者たちに説いた¹⁵⁾。

一方、1903 年に戦闘派の組織であるエメリン・パンクハーストと娘のクリスタベル、シルヴィアがマンチェスターで女性社会政治連合 (WSPU 以下 WSPU とする) を結成した。彼女たちはサフラジェット (女性参政権運動の急進派) (闘争的な女性参政権活動家が、サフラジストと区別して自ら名乗った名称) と呼ばれた。この戦闘派の組織は NUWSS とは全く異なる活動をしていた。それは以下のような活動である。

挑発的で敵対的、懐疑的であった。「言葉でなく行動」ということがそ

の組織のモットーであり、何よりも世間をあっといわせることが意図的な戦略だった¹⁶⁾。

そして、指導者たちは通常の数々の手続きなど無視することは気にせずに、誰に衝撃を与え敵対しようとおかまいなしであった。戦闘派でないものはすべて信用せず、全ての説得を一笑した。

1906年には保守党に代わって自由党が政権を握り、同年に労働党も誕生した。女性たちは今度こそは参政権が実現すると期待したが、そうはいかなかった。これに失望した WSPU は、公共の建物への放火や投石、ショーウィンドーの破壊、電話線の切断、刑務所内でのハンガーストライキなど、より一層過激な行動または反抗へと発展していった¹⁷⁾。1907年に、戦闘派たちはそれまで行ってきた反抗を依然として続けていた。彼女たちは補欠選挙で政府と対立をし、集会で閣僚をやじるなどをしたが、「公務執行妨害」のために路上で逮捕されるだけであった。このような行為を繰り返し経験していきながら、彼女たちは戦略を立てて、相手の不意を突くことにより警察を出し抜く方法を学んでいった¹⁸⁾。彼女たちは、あらゆる種類の変装をして、あらゆる場所に出没した。

ある者は使い走りの少年になり、またある者はウェイトレスの姿を装って現れた。ある時には、首相官邸のあるダウニング・ストリートの柵に自分たちを鎖で繋ぎ、ボウ・ストリートにあるロンドン中央警察裁判所に引き立てられるまで、長い演説をする時間を稼いだ。また、戦略的には打ってつけの場所だった下院ロビーの像に、自らを鎖で繋いだ者もいた。オルガンが置かれている中二階からいきなり飛び出したり、あるいは、何もなさそうな家具運搬車の天窓から様子を伺いながら、急に姿を現わしたりすることもあった。また、突然、駅のプラットフォームに姿を現わしたり、テムズ川から議事堂のテラスに向かって熱弁を振るったりすることもあった¹⁹⁾。

このように、彼女たちは全く思いがけない場所に姿を現わすのであった。

1912年の秋には、最初の集会が開かれパンクハースト夫人は次のように叫んだ。

「私はこの集会を反乱という形で盛り上げたいと思います。それぞれのやり方で戦闘行動を取ろうではありませんか。あなた方の行動のすべての責任を私に取ります」²⁰⁾。

このような言葉は彼女を支持している者たちを陶醉させ、熱狂的にほめたたえて英雄のように崇拜した。

1913年5月のこの日はイギリスでダービー競馬の日で、華やかで活気溢れる競馬の時に、戦闘派サフラジェットの1人であるエミリー・ワイルディング・デイヴィットソンが突然悲劇的な行動をした。彼女は、周囲の人々の関心を自身の主張に引き付けることにより、女性の権利獲得がいかに深刻であり差し迫っているかを証明するために、誰にもその計画を告げることなく疾走する馬に身を投げ出してその後死亡した。彼女の勇氣ある行動は国中を驚かし、関心をかき立てた。彼女が起こした出来事がきっかけで、イギリスには女性は自由であるべきだという信念のために、自ら死を選んだ女性たちがいるということが世界中に知れ渡ることになった²¹⁾。

1918年に、女性の社会的地位に関する3つの重要な法案が通過した。

その一つは、助産婦登録の修正法案であった。(これは、1902年に最初の法案が何とか通過して以来、ずっと却下され続けていたものであった)。もう一つは、非嫡出子の養育費の上限を5シリングから10シリングに増額する法案、三つめは、政府主導で法制化された、女性(21歳以上)下院議員の被選挙権に関する法案であった²²⁾。

この問題に関して長い闘争を覚悟していたサフラジストたちは、この法案の通過に驚いた。彼女たちは参政権獲得の運動の過程で、選挙権の獲得と、国会議員の被選挙権は別物であることや、選挙権が与えられたとしても、被選挙権はついてはこないことを繰り返し言ってきた。1928年2月に国王の

演説中に、選挙権を男女平等にしようとする法案は注目を引く部分となった。この法案は、1928年3月29日に政府法案として提出された²³⁾。

2. ネズビットとジェンダー思想

この章ではネズビットを歴史的に位置づけて、前章で確認した女性の権利運動に対するネズビットの姿勢をみてみたい。女性の権利をめぐる、激しい議論が起こる中で、ネズビットがどのような社会的活動をしたのか、どのように自分の立場を表明しようとしたのかを確認する。

2-1. ネズビットの社会改革活動

時代背景を踏まえて、サミアド三部作をジェンダーの視点から考察すると、決して急進的な社会の変化を求めているようには思われない作品の中に、時代に呼応する新たな意義が見えてくるのではないだろうか、というのが本論文の論じようとするところである。それを検証するために、ネズビット自身がこの大きな変化の時代をどのように生きたのか、確認しておきたい。

ネズビットは、ロンドンのケンジントン地区で6人兄妹の末っ子として生まれる。幼少期から冒険小説を読み²⁴⁾、自作のお話を聞かせることが好きで²⁵⁾、子ども時代から小説家になる夢を抱く。7歳の時に「E. ネズビット」というペンネームで初めて詩を雑誌に発表する。また、寛容な母親の影響で、のびのびとした楽しい子ども時代を過ごしていく²⁶⁾。1879年21歳の時に、ヒューバート・ブラントと結婚し、男の子3人、女の子2人の母親になる。彼女は母親としても個性的で、何をするのに子どもたちに自由に行動させ、友達のような態度をとった²⁷⁾。1899年頃から、小説の題材を自身の子どもの時代にとった物語を書き始め、短編を *The Strand Magazine* に連載する。第1作は *The Story of Treasure Seekers* (1899) で、*The World be goods* (1901)、*The New Treasure Seekers* (1904) と続く。その後も、次々と子ども向けの作品を書き上げるが、彼女の作品に登場する子どもたちは活発で元気がよく、いたずらや喧嘩を繰り返しながら成長する。

ネズビットは執筆の傍ら、フェビアン協会に参加する。フェビアン協会は発足当初、主に国内問題に関心を寄せ、活動範囲もロンドンに限られていたが、ボーア戦争が始まる1900年頃に、国外問題も議論するようになる。フェビアン（フェビアン協会のメンバー）は自由帝国主義を唱える第5代ローズベリー伯爵アーチボルド・プリムローズ²⁸⁾を支持し、「国民的効率」を目指す新党結成を計画する²⁹⁾。また、多くのフェビアンが、1900年の労働党の前身となる労働代表委員会結成に参加した³⁰⁾。1914年に始まる第一次世界大戦の少し前にブランドが亡くなると、ネズビットと子どもたちの生活は苦しくなる³¹⁾。作家として身を立てることが困難な時代であった³²⁾。ネズビットは造船技師タッカーと再婚し、晩年は周りの人との交流を避けるように静かにディムチャーチルという田舎で暮らす³³⁾。

ネズビットは女性参政権運動に直接積極的に関わっているとはいえないが、その生涯をみても、フェビアン協会での活動など、熱心に社会的な問題に取り組んだことはたしかであり、ジェンダーをめぐる問題に無関心であったとは考えにくい。過激化していく女性参政権運動に関わるよりも、より人々に受け入れられやすい方法で、次世代への影響も長く残る方法がより有効であるとネズビットは考えたのではないだろうか。ゆっくりと人々の意識に浸透し、法の制定にとどまらず、道徳的な規範意識において社会を動かす力を有するものが文学であることを知るネズビットが、その旺盛な創作活動を通して、子どもたちに希望を託そうとしたのではないだろうか。

ネズビットは社会改革運動に携わりながら、児童文学という表現手段を選択し、自立に向かう子どもたちの姿を描く。ネズビットにとって、未来を担う子どもたちがどのように社会に適応しながら、どのように自立をはかっていくことができるか、ということが重要であったと考えられる。女性の権利運動の最中であって、ジェンダー思想はネズビットに大きな影響を与えたと考えられるが、サミアド三部作では、日常生活を舞台に妖精サミアドとの関わりにおいて、ジェンダーにとどまらず、個人としての自立性と、異質なものの関係の構築という社会性をともに学ぶ。個性の尊重と他者への思いやりがサミアド三部作のテーマとなる。

2-2. ジェンダーの二項対立を超えて

サミアド三部作において、サミアドは5人の姉弟とともに冒険を繰り返し続けていく。スミスが指摘するように、ネズビットは子どもたちとサミアドを関わらせながら、子どもたちに保守的な役割を超えて、責任を担い、勇敢に困難に立ち向かう機会を用意する。*The Story of the Amulet* では、母親は年長の娘アンシアに、留守の間、弟妹の面倒を託す。アンシアは母親の依頼を素直に引き受け、母親の代理を務め、「女性的な受動性と利他的愛情」を発揮するが、一方において危機的な状況では「ヒロイズム」を見せ、能動的で積極的な男性性と受動的な女性性という「二項対立的なジェンダー役割」を超える³⁴⁾。

アンシアは責任感の強い子どもである。大人の保護のない状況で子どもたちが冒険をし、危ない状況に陥るたびに、アンシアの勇敢さが発揮され、男女の性別役割、つまり男が女の救済者になるという構図が取り払われ、アンシアの判断と勇気が重要な役割を果たす。子どもたちの集団の力関係において、ジェンダー、人種、民族にまつわる分断を超え、他者と関係を築いていくために効果的な小宇宙が生まれる³⁵⁾。

サミアド三部作の中の小さなエピソードが積み重なって、アンシアは責任感に裏付けられた自信を獲得する。そのような出来事のいきさつが *The Phoenix and the Carpet* では一週間の経過として述べられている。

日曜日---じゅうたんの両側に外国の泥のついでていることが発見される。

月曜日---鍋の中で甘草とアニスの実をにたてる。これをやったのはアンシア。ぼうやの咳にきく、とと思ってしたという。その鍋を火にかけてばなしにして忘れ、鍋の底がこげる。この鍋はぼうやのミルクをあたためるためのほうろうの鍋だった。

火曜日---食料室で死んだネズミを発見。お墓を作るのに魚ナイフを使う。結果として残念なことに魚の切身がくずれるという事件が起こる。いいわけ---料理番が死んだネズミを食料室になんかおいておくから悪い。

水曜日---台所のテーブル上にあぶら身のきざんだものが置いてあった。

ロバートがそれにせっけんをきざんでまぜてしまう。ロバートは、あぶら身をてつきりせっけんだと思ってしたという。

木曜日---台所で山賊ごっこをさいちゅう、ぶつかって窓をこわす。ゲームはまったく公平に行われていた。

金曜日---台所の流しにパテをつめて、水を張る。紙ボートを浮かべる湖のつもり。水道をしめ忘れて出かけ、台所の敷物と料理番の靴をめちやくちやにする³⁶⁾。

子どもたちには悪気はないが、その瞬間の判断はつねに予期しない結果をもたらし、アンシアは否応なく対応を迫られることになる。それがアンシアの決断力と行動力を育むのである。

3. アンシアに託されたもの

サミアドは砂の妖精であり、この三部作をファンタジーとして特徴づけるのはサミアドの存在であるが、アンシアに議論の焦点をあてることによって、ネズビットがアンシアをどのように表現しているかに注目したい。そうすることによって、サミアド三部作をフェミニズムの歴史の置きなおし、その意義を探ってみたい。

3-1. サミアド三部作から考察したアンシアの勇敢さ

サミアド三部作の中にアンシアが長女として勇気をふりしぼって弟妹たちを守る場面がある。子どもたちは足手まといになる末っ子の面倒をみるのを嫌がっている。

「だれも、こんな子、いるもんか！ああ、みんなうるさがるんだよ。マーサだって、ほんとはいやなんだ。いやでなけりゃ、じぶんでおもりをするさ。こいつは、じゃまものなんだよ。そうなんだ。ああ、だれか、このぼうずをほしくて、ほしくてたまらない人が、でてきてくれればい

いなあ。ほんとおねがいだよ、そうなってくれないかなあ。そうすれば、ぼくたち、しずかに、なにかできるんだもの」³⁷⁾

遊びの制約になる末子は邪魔でしかたがないと子どもたちは実感している。一番上のロバートが持っているジンジャ・ビアーのびんを末子のぼうやが暴れて倒してしまったことに怒ったロバートが思わず放ったのが「こんな子、いらぬよ。誰かこの子を欲しくてたまらない人がいればいいのに」であるが、そのつぶやきは、たちまち願いの言葉となり、サミアドによって約束された魔法の力を呼びよせて、ぼうやは誰もが欲しがらくらい可愛くなってしまう。

すると、身なりの汚い女が「あたしに抱かしておくれ」としつこく言ってくる。

「あたしに、その子をだかしておくれよ、じょうちゃん」と、あさぐろい顔のうす茶色の髪をしたジプシー女がいました。

「だめです」と、アンシアはいました。

「あたしにだかしておくれ」やはり、顔はあさぐろく、スミのように黒い髪を、あぶらじみたカールにしている女がいました。「あたしは、19人、子どもをもっているんだよ。ほんとだよ」³⁸⁾

アンシアは、「いけません！」と必死になって止めようとするが、どこかから男がやってきてぼうやをひったくってしまう。アンシアは顔を真っ赤にして悔しさのあまり泣き出してしまいが、アンシアは自分が守るべきものが何であるかを学び、自分がとるべき行動を考えはじめる。必死になって守らなければいけない無力な存在に対する責任感の芽生えは、アンシアの意思の強さへの第一歩となる。

やがてアンシアは母親からも頼りにされる存在になっていく。それはアンシアの成長を意味しているとともに、母親の属する19世紀の規範からアンシアが独立し、新しい時代の到来の予感のなかで、新たな自立を獲得しようとしていることを意味していると解釈することも可能である。

The Phoenix and the Carpet で、母親が買ってきた絨毯を子どもたちが部

屋に敷く際、光を放つ黄色い卵が転がり出る。暖炉の近くで卵の殻が割れ、中から不死鳥が登場する。不死鳥は、それが魔法の絨毯であると告げる。アンシアは「少しは思いやりを見せなくちゃね」と言い、「この次にはお茶がらを使ってきれいにするわ。じゅうたんにはお茶がらがいいのよ」と、大切に手入れする。

それが兄によって傷つけられても、アンシアは非難することはない。

するとテーブルの足が、アンシアのつくろった部分をひっかけて、そのほとんどをやぶったばかりか、じゅうたんまで引きさいてしまいました。「あれまあ、やっちまったね。」ロバートはいいました。

でもアンシアはまったく第一級の妹でした。アンシアは一言も文句をいわず、つくろい用の糸と針、指ぬきとはさみをもってきました。そうしているうちにアンシアのあれこれ文句をいってやりたいというごく自然な望みもうすれて、とても親切にこういうことができたのです。

「いいわよ、気にしないで、すぐつくろうから。」

シリルはアンシアの背中をぱたぱたとたたきました。シリルはアンシアがどう感じたかがはっきりわかっていました。そして感謝の気持をそうやってあらわしたのです³⁹⁾。

姉弟たちが子ども部屋にいるときの場面であるが、シリルが絨毯の上のテーブルをずらした際にアンシアが前に直した部分を破り、絨毯は引き裂かれてしまう。しかし、アンシアは文句を言うこともなく縫う。

しかし一方でネズビットはアンシアを非の打ちどころのない献身的な少女として描いたわけではない。アンシアは児童文学を楽しむ読者にとって、等身大の少女であった。

「どうしたの？きみがふろおけをしょっぱい水でいっぱいにしてしま
まえに、お昼ごはんがさめちまうよ。」

「あっちいって。」アンシアはらんぼうにいいました。「あんたなんか、
きらい！だれもかれもきらい！」⁴⁰⁾

アンシアがバスルームで泣いていたとき、シ ril が「どうしたの？きみがふるおけをしょっぱい水でいっぱいにしてしまうまえに、お昼ごはんがさめちまうよ」と言うと、アンシアが、「あんたなんか、きらい！みんなきらい！」と言ってしまふ。普段は穏やかで優しいアンシアの言葉遣いが悪くなり、怒りの感情が出てしまうのも、長女であることのプレッシャーに対する反動である。頼りになる存在として母親からも評価される長女として位置づけられているアンシアであるが、寂しい感情や、弱さも持っている。

ときには無理をして、失敗してしまう少女としてネズビットはアンシアを創出する。何をするのにも完ぺきな「スーパー少女」ではなく、どこにでもいるような普通の女の子である。だからこそ、その時代にアンシアの物語を読む少女たちは、作品から勇気と希望を引き出すことができたのではなからうか。アンシアは、20世紀の幕開けにいる少女たちにとって、規範のなかにありつつ、自分の意思を持ち、自己表現をすることのできるモデルだったと言える。そして、そのような読書経験を経て育った少女たちが、次の時代のイギリス社会を担い、女性の権利が実現する時代の土台作りに貢献していったと言える。

おわりに

19世紀から20世紀にかけて女性参政権運動が行われていた時代はネズビットが生きてきた時代であり、フェビアン協会で社会主義活動をしていた時代である。彼女が参政権運動に対し無関心であったとは言い切れない。彼女は1902年から1906年の間にサミアド三部作を書いた。その時代にそれらの物語を読んでいた少女たちには、自立心や判断力、責任などは持ち合わせてはいない。女性に権利がないときにその時代を（物語内で）生きたアンシアに、ネズビットは自立した生き方や物事に対する発言する力を与えた。1928年に権利が獲得して、当時の少女たちが成長し、大人になっていく過程で精神的自立を保てるようになる。年表のように歴史の側面だけを追っていくこともできるが、少女たちが彼女の作品を読んでいきながら、どのよう

に成長していったのかさえも歴史の一部だと考えてもよいのではないかと思うのである。ネズビットはフェビアン協会の一員ではあったが、参政権運動に直接的な関りはなかった。しかし、アンシアという少女を創り上げたことに当時の女性たちや社会に対し貢献をしていったのではないか。

サミアド三部作は魔法の絨毯や魔除けの道具などの常套的なファンタジー装置も多く盛り込まれ、時間を自由に行き来するファンタジーである。そして児童文学は時代を超越するものとなり、規範の内部にありながら、規範の制約を変換する表現媒体になると考える。そこに社会主義運動に関わりつつ活発な創作を続けたネズビットの真意もあると言えるだろう。「男の子は男らしく、女の子は女の子らしく」という規範の中にありながら、勇敢を第一の美德とするアンシアの創出の影響力は看過できない。ファンタジーという空想的空間において、新たな人物像を生みだし、広い読者に読まれることも、一つの社会改革であるにちがいない。

註

- 1) *Five Children and It, The Phoenix and the Carpet, The Story of the Amulet* からの引用は、それぞれ、E・ネズビット『砂の妖精』石井桃子訳、E・ネズビット『火の鳥と魔法のじゅうたん』猪熊葉子訳、E・ネズビット『魔よけ物語』上下 八木田宣子訳を参照し、日本語翻訳のページを示す。
- 2) 5人の子どもたちは、年長者から、シ ril、アンシア、ロバート、ジェイン、ヒラリーである。末っ子は名前ではなく「The Lamb = ぼうや」と呼ばれている。
- 3) 酒井妙子、『アリスの服が着たい』勁草書房, 2007, p. 7.
- 4) レイ・ストレイチャー、『イギリス女性運動史 1792-1928』栗栖美知子, 出渕敬子監訳, みすず書房, 2008, p. 38.
- 5) 同上, p. 38.
- 6) 同上, p. 38.
- 7) 同上, p. 38.
- 8) 同上, p. 31.

- 9) 同上、p. 32.
- 10) 同上、p. 33.
- 11) 同上、p. 33.
- 12) 同上、p. 5.
- 13) 同上、p. 256.
- 14) 同上、p. 256.
- 15) 同上、p. 257.
- 16) 同上、p. 257.
- 17) 奥田暁子・秋山洋子・支倉寿子編者、『シリーズ〈女・あすに生きる〉⑧ 概説 フェミニズム思想史』ミネルヴァ書房, 2003, pp. 101-102.
- 18) レイ・ストレイチー、『イギリス女性運動史 1792-1928』栗栖美知子, 出淵敬子監訳, みすず書房, 2008, p. 260.
- 19) 同上、p. 275.
- 20) 同上、pp. 279-281.
- 21) 同上、pp. 311-312.
- 22) 同上、p.312.
- 23) 同上、p. 326. このような出来事を取り扱った映画も上映された。(ガヴロン・サラ、『未来を花束にして』Suffragette, BFI, Canal, パテ, 2015)。
- 24) 桂宥子・牟田おりえ編著、『シリーズ・はじめて学ぶ文学史⑥ はじめて学ぶ英米児童史』ミネルヴァ書房, 2004, p. 100.
- 25) 同上、p. 100.
- 26) 同上、p. 100.
- 27) 同上、p. 100.
- 28) 「アーチボルド・プリムローズ (第5代ローズベリー伯爵)」<https://howlingpixel.com/i-ja/> (2019.10.29 閲覧)
- 29) 「フェビアン協会」<https://howlingpixel.com/i-ja/> (2019.06.17 閲覧)
- 30) 同上。
- 31) E・ネズビット『砂の妖精』石井桃子訳, 角川書店, 1963, p. 259.
- 32) 同上、p. 259.
- 33) 同上、p. 259.

- 34) Michelle, Smith. "E. Nesbit's Psammead Trilogy: Reconfiguring Time, Nation, and Gender." *English Literature in Transition*, 2009, Vol. 52 Issue 3, p. 300.
- 35) Ibid.
- 36) E・ネズビット『火の鳥と魔法のじゅうたん』猪熊葉子訳, 岩波書店, 1983, p. 231.
- 37) E・ネズビット『砂の妖精』石井桃子訳, 角川書店, 1963, p. 74.
- 38) 同上, pp. 83-84.
- 39) E・ネズビット『火の鳥と魔法のじゅうたん』猪熊葉子訳, 岩波書店, 1983, pp.309~310.
- 40) E・ネズビット『魔よけ物語』下 八木田宣子訳, 講談社青い鳥文庫, 1995, p. 78.

参考文献

(書籍)

- Nesbit, Edith. *Five Children and It*, Virago Modern Classics, 1902. E・ネズビット『砂の妖精』石井桃子訳, 角川書店, 1963.
- . *The Phoenix and the Carpet*, Puffin Classics, 1904. E・ネズビット『火の鳥と魔法のじゅうたん』猪熊葉子訳, 岩波少年文庫, 1983.
- . *The Story of the Amulet*, Gold Edition, 1906. E・ネズビット『魔よけ物語』上下 八木田宣子訳, 講談社青い鳥文庫, 1995.
- 奥田暁子・秋山洋子・支倉寿子編者. 『シリーズ〈女・あすに生きる〉⑱ 概説 フェミニズム思想史』ミネルヴァ書房, 2003.
- 坂井妙子. 『アリスの服が着たい ヴィクトリア朝児童文学と子供服の誕生』勁草書房, 2007.
- 本多英明・桂宥子・小峰和子編者. 『シリーズ・文学ガイド⑥ たのしく読める英米児童文学《作品ガイド120》』ミネルヴァ書房, 2000.
- ストレイチー、レイ. 『イギリス女性運動史 1792-1928』栗栖美知子, 出淵敬子監訳, みすず書房, 2008.

(学術論文)

Smith, Michelle. "E. Nesbit's Psammead Trilogy: Reconfiguring Time, Nation, and Gender" *English Literature in Transition*, 2009, Vol. 52 Issue 3, pp. 298-311.

(映画)

『ジム・ヘンソンの不思議の国の物語』NBCユニバーサル・エンターテイメントジャパン, 2004.

『未来を花束にして』Pathe Productions Limited, Channel Four Television Corporation and The British Film Institute, 2015.

(ウェブサイト)

「アーチボルド・プリムローズ」<https://howlingpixel.com/i-ja/> (2019.10.29 閲覧)

「フェビアン協会」<https://howlingpixel.com/i-ja/> (2019.06.17 閲覧)

「ブラックストーン-126203」<https://kotobank.jp/word/> (2019.07.23 閲覧)